

人間の福祉 第10号 (2001) 121～135

ジョンズ・ホプキンス大学病院における パストラル・ケア・サービスについて

溝 口 元※

On the Johns Hopkins Hospital's Pastoral Care Services

Hazime MIZOGUCHI

Faculty of Social Welfare, Rissho University, Saitama, Japan

Recently, pastoral care has been interesting in Japanese medical profession and social welfare world. I stayed John Hopkins University as a visiting scientist during spring and summer in 2000. During this period, I investigated the present situation of terminal care and spiritual care in the U.S. Then, I researched the system of pastoral care in the Johns Hopkins Hospital. In the present study, I mentioned the outline of Johns Hopkins Hospital, then, I introduced the activity of the department of the pastoral care of the hospital. Finally, I discussed relationship between spiritualism and medicine taking Japanese Buddhism into consideration.

Human - Well being No. 10 (2001)

Key words : pastoral care, health care, spiritualism, Johns Hopkins Hospital, bioethics

1. はじめに

筆者は、2000年4月から7月まで、立正大学在外研修員・特別研究員として米国メリーランド州ボルチモア市に所在するジョンズ・ホプキンス大学医学部医学史研究所 (The Institute of the History of Medicine, Johns Hopkins University School of Medicine) に赴き、「Visiting Scientist」の資格で研究に従事することができた。続いて、同年9月から2001年3月まではワシントン州シアトル市に広大なキャンパスを構えるワシントン大学医学部医学史及び医療倫理

※立正大学社会福祉学部社会福祉学科

キーワード：パストラルケア、ヘルスケア、スピリチュアリズム、ジョンズ・ホプキンス病院、生命倫理

学教室（Department of Medical History and Ethics, University of Washington School of Medicine）に「Visiting Scholar」として滞在した⁽¹⁾。年間を通じたテーマは、「米国における生命倫理学およびリハビリテーション医工学の現状と展望」であった。

一方、立正大学社会福祉研究所のプロジェクト「ホスピス・ケア班」の班員として、ターミナル・ケアを患者よりも疾病そのものの治療に力点を置いた現代の高度先端医療技術のある種の限界、および「医」の原義に関わる事態と捉え、その方法論上の問題を検討してきた。そして、一つの可能性として疾病に対する「癒し（ヒーリング）」の効果を考慮し、その成果を「動物介在療法：新たな「癒し」の一形態」と題して公表した。これは、近年、日本においてもアニマル・セラピー、動物介在療法なる言葉を耳にするようになってきたが、人間がイヌ、ネコなどの動物達と共に暮らすことにより、精神的、肉体的健康に大きな効果が与えられることがあるという事例をヒントに「癒し」を多面的に考察したものである⁽²⁾。

これらを基に本稿では、まずジョンズ・ホプキンス大学の概要を紹介する。そして、生命倫理学と関連させて同大学病院の「在宅ホスピス・霊的ケア・サービス（Home Hospice Spiritual Care Services）」（滞在中に「霊力・医学研究所（Institute on Spirituality and Medicine）」に改組）を傘下に置く、「パストラル・ケア部（Department of Pastoral Care）」の活動を論じる。また、パストラル・ケアは実質的に宗教の生命倫理への関与につながっていることから、米国におけるこのケアの捉え方および日本の仏教における生命倫理への態度についても触れていく。こうした作業が、今後日本でも活発な議論がなされていくと思われるパストラル・ケアを考慮したターミナル・ケアの将来像を検討する素材になりうれば幸いである。

2. ジョンズ・ホプキンス大学医学部・病院

2-1. ジョンズ・ホプキンス大学について

ジョンズ・ホプキンス大学は、世界初の大学院を設置した米国東部の有力私立大学としてよく知られている。今日、我が国でも盛んに言及されるようになった大学院大学、研究者養成型大学の端緒である。ボルチモア市の実業家で銀行業と鉄道建設への投資で財をなしたジョンズ・ホプキンス（Johns Hopkins, 1795-1873）の「ボルチモア市の発展のために大学と病院を」という遺言と遺産により、まず大学が1876年に設立された。当初は、ワシントン記念碑が聳え立つ市の中心部からほど近いところに設置された。今日の文理学部ないし教養学部に近いもので、学科としては数学科、物理学科、化学科、生物学科、英文学科、独文学科、仏文学科、哲学科、史学科、教育学科、社会科学科などを擁していた。このキャンパスで、日本の「動物学の父」と呼ばれる箕作佳吉（1857-1909）や日本初の心理学者元良勇次郎（1858-1912）、同志社大学の創設者新島謙（1843-1890）、5000円札の肖像に用いられている政治学・国際関係学者新渡戸稲造（1862-1933）らも学んだのである⁽³⁾。

これらの学科の内、生物学科は米国初のものであった⁽⁴⁾。元来欧米では、生物学は基本的に

動物園や植物園などで研究がなされていたが、19世紀後半から医学教育の前提としての生物学的知識の必要性に対する認識や農業技術、博物館の質的向上からこの分野が重要視されるようになってきた。ジョンズ・ホプキンス大学生物学科の開設は、まさにこうした背景の下に行なわれたのであった。また、医学部の設立が遅れた分だけ生物学独自の研究が進展する結果を生んだ。大学が次第に充実するにつれて、当初のキャンパスが手狭になってきたことなどから、19世紀末には市の中心部から北に約7kmほど離れた自然が豊富なホームウッド・キャンパス (Homewood Campaus) への移転が始まり、1910年代までに完了した。米国の代表的な心理学の一つであるワトソン (John B. Watson, 1878-1958) の行動主義 (心理学) は、新旧両キャンパスで確立したことになる。

一方、病院の設立は難航したが、1889年に現在の所在地と同じ同市の中心部からやや東の地に設けられ、医学部は1893年に設立された。病院の方が医学部よりも先に設立されたため、現在でも大学病院 (University Hopsital) の機能を果たしているものの、正式名称は「ジョンズ・ホプキンス病院 (Johns Hopkins Hospital)」である (写真1)。東ボルチモア・キャンパス (East Baltimore Campus) の中央部に陣取っている。逆に、病院の敷地内に医学部の教室群が点在する趣きである。一見、札幌市の旧北海道庁舎に似ている設立時のレンガ造りの立派な病院建物は、事務管理棟として現在も利用されている (写真2)。外来者数は、一日平均約25,000名であり全米屈指の病院である。

たまたま筆者の滞在時に、この病院が「全米最優秀病院 (The Best American Hospitals)」に選出された。その報道があった翌日からしばらくの間、病院・医学部関係スタッフ、患者各位及び患者の近親者の方々へ謝意を表する横断幕が病院の各入口に張り出されていた。東ボルチモア・キャンパスには、大小の病棟、事務管理棟、医学部 (School of Medicine)、看護学部 (School of Nursing)、公衆衛生学部 (School of Public Health) の3つの学部、17の研究所を含めて全部で51の建物があり、ジョンズ・ホプキンス大学医療関連施設群 (Medical Institutions) を形成している。また、同じメリーランド州にある「米国保健研究所 (National Institute of Health)」や「米国がん研究所 (Natalinal Institute of Cancer Research)」, 「メリーランド総合病院 (Maryland General Hospital) とは、距離的にも近いので密接な連絡を取り合い先端的な医学研究や医療行為を進めている。

病院、医学部がこのような進展を遂げることができたのは、初代医学部長のウィルチ (William Henry Welch, 1850-1934) の功績が大であったといわれている。彼は、コネチカット州の代々医業を営む家系に生れたため、本人の意志よりも親族の希望に従い、しぶしぶ医学を学ぶようになったという。コロンビア大学内科外科学部 (Columbia University College of Physicians and Surgeons) を1875年に卒業。翌年秋、医療の実践家の養成ばかりでなく実験室を伴った科学的医学の研究をめざすジョンズ・ホプキンズ大学医学部の設立趣旨に共鳴し、その教授就任予定者としてドイツに渡り当時世界最高水準の医学研究の現場に触れた。ストラスブルグ大学では、組織学をワルダイエル (Heinrich Wilhelm Gottfried von Waldeyer-Hartz,

1836-1921) に、病理学をフォン・レックリングスハウゼン (Friedrich Daniel von Recklingshausen, 1833-1910) に、生理化学をホッペ＝ザイラー (Ernst Felix Immanuel Hoppe-Seyler, 1825-1895) に学んでいる。1884年に晴れてジョンズ・ホプキンス大学の病理学教授に就任し、当初は生物学科の実験室に間借をして研究を開始した⁽⁵⁾。

この頃、ドイツではよく知られているコッホ (Robert Koch, 1843-1910) が細菌学の研究で続々と画期的な成果を挙げていたため、再度渡独、病理学的解剖学をウィルヒョウ (Rudolf Ludwig Karl Virchow, 1821-1902) から、実験病理学をコーンハイム (Julius Friedrich Cohnheim, 1839-1884) から、細菌学をコッホから学び、その知識や技術を身に付け母国の研究・教育にあたったことになる。医学部学生には、生物学、化学、物理学、ドイツ語、フランス語を学ぶことを求めている。さらにウィルチは米国初の実験重視の医学専門雑誌「実験医学雑誌 (Journal of Experimental Medicine)」の創刊に関与した。こうしたウィルチの主導による医学教育は、米国の医学教育全体にも大きな影響を与えることになった⁽⁶⁾。晩年のウィルチは、医学を学ぶにあたって医学史の重要性を自覚し、1927年から翌年に掛けてヨーロッパに医学書、医学雑誌の買付けに出向いている。これが現在のジョンズ・ホプキンス大学ウィルチ医学図書館 (1929年開設) (写真3) の骨格となった。米国医学史学会 (The American Association for the History of Medicine) の事務局と医学史研究所がここに置かれ、国際的に評価が高い「医学史紀要 (Bulletin of the History of Medicine)」を刊行している。また、通り1本を隔てて極めて充実した医学アーカイブ (Alan Mason Chesney Archives) (写真4) を擁しており、筆者は研究所、病院、図書館そしてこのアーカイブと極めて良好な環境の下で研究生活を送ることができた。

2-2. ジョンズ・ホプキンス大学病院における福祉的風景

ジョンズ・ホプキンス大学病院におけるソーシャル・ワーカーが関わっている活動で興味を引いたのが、外来患者や入院患者を見舞いに訪れた近親者への健康問題に関する啓発であった。主として米国病院協定会 (American Hospital Cooperative Association) の会員が行なっているが、それを調整するのが病院ソーシャル・ワーカーの仕事の一つということであった。

外来者も利用できる病院カフェテリアの入口通路で、月に不定期で数回活動をしていた。日頃の健康に関する注意事項や同様な疾病を患っている人たちの団体の紹介の他、旅行の案内や古書の販売も行なわれていた。「医学の父」、「医聖」と呼ばれる古代ギリシアのヒポクラテス以来の伝統であろうか「転地療法」の効用ということで、場所的にはバミューダやフロリダの保養地を配慮された価格で案内していた。また、入院患者やその近親者のための書物も、ベストセラー系から闘病記など品揃えに配慮がなされ、刺激が強そうな殺人事件や猟奇的な出来事などで死を扱ったものは避けていた。

医学部の学生たちが担当している活動に、小児病棟の長期入院児童に対する運動会の開催があった。毎年1回6月に行なわれる「のんびりカメ (Slow Turtle)」と呼ばれるもので、筆者が

滞在した研究所の中庭で23回めの催しが行なわれた。学生それにボランティアたちは、当日朝早くから準備に追われていた。運動会がはじまると、子供達が車椅子のスタンドに点滴などの薬物の袋や、ある種の気体が詰められたボンベを装着し続々と会場に入場してきた。その数はざっと数えて70名ほどであった。実際に体を動かして参加できる子供はきわめて少数だが、医学部学生たちはぬいぐるみを着ておもしろおかしく動き回り、見せて楽しませる工夫をしていた(写真5, 6)。

これとは別に、心がなごんだのが退院風景である。おそらく、人間にはさまざまな場面で素晴らしい「顔」があるに違いないだろうが、子供達が退院し、病院の玄関から迎えの車に乗り込む時の顔はなんともいえないものであった。風船、袋入りのお菓子、ぬいぐるみが退院時の「三種の神器」のようで、どの子もこれらのものを溢れんばかりに抱えて、病院を後にしていた。もっとも、その横から新たに入院する子供達が運ばれてきてはいるのだが。

また、ホームウッド・キャンパスのグラウンドでは、「夢の競技場 (Dream Field)」と名付けられた障害児・者の運動会が開かれているのに遭遇した。ジョンズ・ホプキンス大学の学生の他、多数の地元・近隣ボランティアが多数参加していた。ここでの特徴は、日本でも最近見かけるようになってきた、同じ世代の健常者が同じ世代の障害児・者へボランティア活動をするというものである。この時の参加者をみていると、「アフリカ系米国人」で障害がある人たちと「肥満」の人たちが中心であった。日本では見かけることがほとんどないと思われる組み合わせであった。両者の共通点の一つは体が自由に動かないことと感じた。米国における肥満はまさに社会問題だが、大学病院では少なくない人数の通院、入院を含めて重篤な拒食症に陥り、文字どおり「骨と皮」に近い患者さんたちをしばしばみかけた。

2-3. ボルチモア雑感

現在のジョンズ・ホプキンス大学は、前述の医学部、看護学部、公衆衛生学部を擁する東ボルチモア・キャンパスと文理学部 (School of Arts and Sciences)、工学部 (School of Engineering)、経営学・教育学専門研究学部 (School of Professional Studies in Business and Education)、上級国際関係学部 (School of Advanced International Studies) が陣取るホームウッド・キャンパスの2校地制をとっている。両キャンパスは、専用のスクール・バスで結ばれ、朝晩は約10分間隔で、それ以外は30分間隔で運行されている。始発は午前6時30分、最終は午後11時30分である。両キャンパスのちょうど中央に、ボルチモア市最大のペンシルヴァニア駅がある。

ここから、ニュースでお馴染みのホワイト・ハウスや連邦議会、スミソニアン博物館、ペンタゴン、FBI本部、NASA、ウォーター・ゲートなどがある同じメリーランド州内のワシントン・コロンビア特別区 (Washington District of Columbia : D. C.) のユニオン駅との間を往復するメリーランド州鉄道システム (MARK : Maryland Mass Railway System) の列車が運行している。ボルチモア市のペンシルヴァニア駅からワシントンD. C. のユニオン駅までは

50分ほどである。またMARKと駅舎を共有し、ワシントンD. C. からボルチモア、フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストンと米国東部の主要都市を結ぶ鉄道アムトラックが1日数本走っている。さらに、ペンシルヴァニア駅を起点として、米国初の鉄道であるボルチモア・オハイオ鉄道のボルチモア市における主要駅であったカムデン・ヤード駅を経由し、ボルチモア・ワシントン国際空港 (Baltimore-Washington International Airport) まで、路面電車が日中は17分間隔で走っている。このカムデン・ヤード駅のとなりに、かの野球王ベーブ・ルース (Babe Ruth (George Herman Ruth), 1895-1948) が在籍したボルチモア・オリオールズのホーム・グラウンドがあり、さらにその西側に彼の生家が「野球博物館 (Baseball Museum)」として現存している。

1960年代半ばまで、ボルチモア市は路面電車の走行距離が全米で最長の都市であったという。なお、同市の内港 (Inner Harbor) から西へ歩いて10分ほどの地に設立された「鉄道博物館 (Railway Museum)」は、ワシントンD. C. に拠点を置くスミソニアン協会の傘下に入っており、米国初の蒸気機関車から鉄道全盛時代の寝台車や食堂車などを含む各種車両が、良好な保存状態で見学に供されている。ところで、ボルチモアからニューヨークへ鉄道で行く場合、ボルチモアのペンシルヴァニア駅からニューヨークのペンシルヴァニア駅へ向かうことになる。どちらも駅名がペンシルヴァニアである。ここで、途中のペンシルヴァニア大学があるペンシルヴァニア州フィラデルフィアの駅名が、ペンシルヴァニア駅ではないところがおもしろい。

また、ボルチモアは地形的には、チェザピーク湾の入り江の一つに所在する。一見して、軍事上の拠点に都合がよいことがわかる。したがって、米国海軍の拠点アナポリスもこの湾の入り江の一つに陣取っており、ボルチモア、ワシントンD. C. それぞれから約50キロの距離である。両市からは、日に数本路線バスが運行されている。ボルチモアは、マックヘンリーの地に米英戦争の際、初めて米国旗である星条旗が立てられ、それをみて国歌「星条旗よ永遠なれ」がつくられたところである。地元の人たちはこのことを大変誇りに思っており、米国で初めて星条旗が作成された家が「星条旗博物館 (Star Spangled Banner Museum)」として運営されている。観客が1人の時でも（私の場合がそうであった）、歴史的展示物を係員が丁寧に説明してくれた。じつは、この博物館の設立に尽力し初代の資料管理人 (Curator) となった人物は、第一次世界大戦に参戦しドイツ軍が使用した世界初の毒ガス兵器により失明したとのことであった。旧日本陸軍も製造していた「塩素ガス」や「イペリット」の被害を受けたわけである。英仏軍で約5000名の死傷者を数えるといわれるが、被害は参戦した米国兵士にも及んでいたことになる。また、当館員の説明では、現在でも米国における星条旗の約70%がボルチモア市とその近郊で生産されているとのことであった。この地で縫われた星条旗第一号が、ワシントンD. C. の「スミソニアン歴史博物館 (Smithsonian Historical Museum)」に麗々しく飾られているのは、よく知られているところである。

また、ボルチモア市にはかつて「奴隷市場」があった。ウン、ブタ、ウマ、ニワトリに混って当時の呼称で「ニグロ」が「セリ」に掛けられていた。同市の中心部にある「メリーランド

歴史博物館 (Maryland Historical Museum)」には、当時のセリの落札結果を示す書類が掲示されている。働き盛りの30代半ばの男性「ニグロ」の価格が乳牛の約4倍との記載をみて、たまらない気持ちになったのは当然の事ながら私一人ではないだろう。また、ここから様々なことを考えさせられることになる。たとえば、市の中心部からもペンシルヴェニア駅からも徒歩では約20分ほどのところに、「偉大な黒人博物館 (Great Black Museum)」がある。米国において、いかに「黒人」が虐げられ屈辱的な思いをさせられてきたかを、これでもかといわんばかりの展示物が無言で語っている。この博物館の一見わかりにくい地下にある、「黒人」を「白人」が虫けらのように虐殺しているジオラマや、ちょうど梅干しのように大きなビン一杯に詰められた「黒人」のくり抜かれた眼球の山には、思わず眼を背けずにはいられなかった。

じつは、ここで「黒人」と表記したが、ことばの問題も考えさせられることであった。「黒人」(Black) という語は使わずに、「アフリカ系米国人」(African-American, Afro-American), 「インディアン」(Indian) とはいわず、「先住米国人」(Native American) の語を使うことは先刻承知していた。しかし、当事者達がこのような「言い換え」を必ずしも歓迎しているわけでもない場面に遭遇した際、さらに複雑な思いに駆りたてられた。なお、米国東部の大学は先住米国人が平時の際、体を鍛えるために行なっていたというスポーツ「ラクロス」が大変盛んである。これはカナダの国技でもある。ジョンズ・ホプキンス大学ホームウッド・キャンパスには、この「ラクロス博物館 (Lacrosse Museum)」がある。筆者の滞在時(5月21日)に、ジョンズ・ホプキンス大学対ユタ大学のラクロスの試合が、ジョンズ・ホプキンス大学スタジアムで行なわれ、それを観戦する機会を得た。試合はTV中継がなされ、地元のメリーランド州ばかりでなく近隣の州からも観客が多数押し寄せ満席の状態であった。

ジョンズ・ホプキンス大学は現在、学部学生総数が約3800名であり、1学年の学生数は1000名に満たないこじんまりした大学である。大学院生は約1000名でそのうち、博士号取得者は例年約150名である。学生数の割には広大なキャンパスがあり、図書館はアーカイブを含めて極めて充実している。欧米で刊行された大半の学術雑誌は、創刊号から欠号なく揃えられており、学術書も学位論文の複製を含め、当該分野に必要な基本図書が電子媒体と共に十二分に所蔵されていた。そして、平日は早朝から深夜まで、休日でも閲覧できる体制が採られている。

3. ジョンズ・ホプキンス大学病院パストラル・ケア部

3-1 パストラル・ケアをめぐる

パストラル・ケアは、近年名称こそ知られるようになってきたが、医療・福祉のターミナル・ケアの場面では必ずしも主流になっているものではないと感じられる。たとえば、ワシントンD. C. にある全米ソーシャル・ワーカー協会 (National Association of Social Workers) が編集した『ソーシャル・ワーク事典』⁽⁷⁾には、パストラル・ケアの説明はなく「パストラル・カウンセラー (Pastoral Counselor)」の項目にそれに該当する内容が説明されている。「教会の援

助あるいは自主的な施設のどちらかで、クライアントに“カウンセリング”および“サイコセラピー”を行なう聖職者あるいはかつて聖職者であった人」と定義されている。そして、「この職業の多くの従事者は、神学校でカウンセラーとしての訓練を受けているか、そうでなければソーシャル・ワークおよび他の分野で付加的な教育を受けている。彼らは、（問題理解を）“結婚療法（Marital Therapy）”、婚前指導、“霊的カウンセリング”に特化する傾向がある」と述べている。この最後の霊的カウンセリングがパストラル・ケアと関係する。

一方、生命倫理の領域では、この分野の確立初期の記念碑的著作である『生命倫理百科事典（Encyclopedia of Bioethics）』⁽⁸⁾に「パストラル・ミニストリー（Pastoral Ministry）」と題した項目が6頁にわたって解説されている。序論、ヘルス・ケアの提供者としての聖職者、霊的ケアの提供者としての聖職者、医学教育者、倫理実践者、学者としての聖職者、結論から構成されている。要約すれば、「癒し」と「ヘルス・ケア」は、元来聖職者に不可欠な仕事であった。聖職者と医学の間でその「関係」が語られる様になったのはここ数世紀のことである。1970年代以降、医学の急速な進展と共に一連の倫理的問題が生じ、医学における聖職者の役割が増加した。聖職者がヘルス・ケア・チームに一員として加わるようになってきたし、神学的な訓練を受けた人物が医学部で教育するようになった。聖職者の使命が「癒し」や「ヘルス・ケア」と関係するようになってきたのである。ということになろう。

3-2. ジョンズ・ホプキンス大学病院パストラル・ケア部について

ジョンズ・ホプキンス大学病院パストラル・ケア部は、病院の「アルフレッド・ブラロック化学棟（Alfred Blalock Chemical Science Building）」内に設けられている（写真7）。チャプレンで部長の1名（写真8）と事務職員1名が勤務していた。両者は、筆者の長時間にわたるインタビューに、不快な顔一つせず対応して下さった。基本的には、生命倫理の領域でしばしば言及されてきた内容を、直に当事者から耳にすることができたという印象であった。ここでは、その内容を要約しながら紹介したい。

ジョンズ・ホプキンス大学病院でも、パストラル・ケアを始めたのは1992年と比較的最近の事であった。もっとも、その前史は1950年代頃からみられた。すなわち、先端医療技術の進展に伴い、それまで手の施しようのなかった重篤な疾病に罹った人たちの命が救えるようになった反面、必ずしもその「恩恵」に預かることができなかった人たちも多数存在した。また、とくに末期がんの患者さんたちの多くにみられるように「苦痛」を伴う場合の対処に問題があった。今日でこそ、この苦痛への対応は「ペイン・コントロール」として急速な進展を遂げているし、従来のような「鎮痛剤」の使用によって苦痛は一時的に避けることができて、逆に「死期」を早めてしまうようなことも改善されてきている。しかし、事態としてはそれほど顕著に変化したわけではないようである。

そこで、現在の先端医療技術を駆使しても対応できない場合の手段を探究するということになる。その際の前提を単純に図式化すれば、「先端医療技術とは別に、残された命を精神的に充

実して人生を全うする」ということになる。具体的にこのパストラル・ケア部にどの程度の利用者が訪れているのか、その実数については回答して頂けなかったが、筆者とのインタビュー中でも頻繁に電話による問い合わせがあったし、待合室が無人になることはなかったのでおよその利用者数は推定されよう。

このパストラル・ケア部のサービス内容は、以下のようである。

- ・ パストラル・ケアおよび霊的ケア
- ・ 苦痛相談
- ・ 婚前相談
- ・ 聖さん奉仕
- ・ 敬慕および記念サービス
- ・ 直接的相談
- ・ 学際的相談
- ・ 種々の宗教の聖職者との連絡
- ・ 患者の聖職者とケアについての調整
- ・ 24時間パストラル対応体制

一方、まったく幸いなことに筆者の滞在中にジョーンズ・ホプキンス大学医学部ターナー講堂で「精神的健康・精神的疾患と霊力 (Mental Health-Mental Illness and Spirituality)」と題するセミナーが開催された (5月8日から10日まで)。医師、心理学者、ソーシャル・ワーカー、看護師、聖職者などを対象に「参加者が、とくに精神保健と精神的疾患に関係する霊力と癒しの技法や科学の交点に関する最新の情報によりなじめるようになる」ことを目的としていた。以下のセッションを中心にセミナーが実施された。

5月8日 (月)

午前「宗教および精神保健的ケアの歴史」

「希望に満ちた心へのシンプル・ケア」

午後「霊的カウンセリングに対する精神療法とその威力の展望」

「宗教的関わりと精神保健の連合」

5月9日 (火)

午前「霊力・治療的楽天主義と希望：精神的疾患と慢性病の処置に対する批判的処方」

「宗教的観念化と評価」

午後「奮闘と霊力：精神保健とパストラル・ケア」

「教区看護：古代聖職者への復帰」

5月10日 (水)

午前 パネル・ディスカッション「二千年紀信仰」

この内、筆者が興味を持った「奮闘と霊力：精神保健とパストラル・ケア」について触れた。演者は『宗教と極致の心理学：理論，調査，実践』⁹⁾などの著作があるオハイオ州のボーリング・グリーン州立大の臨床心理学者パーガメント（Kenneth I. Pargament）であった。講演の要旨は次のようである。長年にわたって、聖職者や精神保健従事者は人生に目的をもつことの重要性を認識していた。そして、人生に対する目的や意義の消失は、抑圧、心配、仕事への不満足、婚姻、葛藤、病い、死などに対して多様で否定的な結果を導いてしまうと信じている。最近の研究は、こうした考えに支持を与えている。目標へ向かって奮闘をする人々は、霊的に方向付けられた人々よりも「よりよく生きる」経験をすることも知れない。

そして、個々人のこの奮闘をどのように評価するか、いかに個人が意味ある方向に癒されるのを知ることができるのか、いかにして人々が奮闘に際して生じる障害を取り除くのを援助できるか、奮闘によって生じる葛藤をどのように解決するか、いかに人生の意義の新たな源泉を見出すことを援助できるかなどを検討したものであった。

4. 仏教と生命倫理

それでは、キリスト教以外の宗教ではどのように考えているのであろうか。ここでは立正大学と密接な関係がある仏教における生命倫理を取り上げてみたい。1991年にオランダから出版された『生命倫理年報（*Bioethics Yearbook*）』の第1巻は、それを知る好素材と思われる。現在の世界の主要な宗教における生命倫理に対する態度を集めたもので、キリスト教では、カソリック、英国国教会、ルター派、メソジスト派、バプチスト派などを、さらにヒンズー教、仏教、イスラム教、ユダヤ教などを取り上げている。

これに大正大学の藤井正雄が「仏教と生命倫理（Buddhism and Bioethics）」と題した論文を寄せている¹⁰⁾。“仏教倫理における一般的原理（General Principles of Buddhist Ethics）”と“仏教生命倫理（Buddhist Bioethics）”の2部から構成されているものである。それぞれを要約していきたい。

仏教倫理は、究極の目標である「悟り」に達するため日常生活を調節する一連の指針から構成されている。それはブッタの教えによれば、世俗的な価値を拒否し、真実への洞察を得ることを試み、人生における真の幸福を見出すことである。ブッタ自身は“人間の魂は死後の体で生存するのか死とともに滅するのか”というような問題に対しては、沈黙を守った。

また、ブッタは人間は人間の悲惨な現実、その原因、永久にそれを根絶する途の探究をすべきであると述べている。それは、仏教生活の基本原則である快楽主義も禁欲主義も避ける中庸の途（middle way）（中道）である。この中道は、以下の「四諦」すなわち、1. 苦痛が存在すること（苦諦）、2. 苦痛は利己的な願望によって生じること（集諦）、3. 利己的な願望は克服できること（滅諦）、4. それは次のさらなる8つの途（「八正道」）によって克服できる（道諦）ことである。その8つとは、1. 正しい見解（正見）、2. 正しい思い（正思）、3. 正し

い言葉 (正語), 4. 正しい行為 (正業), 5. 正しい生活 (正命), 6. 正しい努力 (正精進), 7. 正しい気使い (正念), 8. 正しい精神統一 (正定) である。これらは仏教徒の 1. 倫理的行為, 2. 精神の集中, 3. 智恵の 3つの修養の段階でもある。

仏教と生命倫理では、まず日本における仏教徒の活動について解説している。すなわち、医療技術の向上に伴い70%以上の人々が病院で死去する現実に対して、仏教各派は1980年から医療技術の進展が生と死の問題に与える影響に対して検討を始めた。たとえば、1984年に設立された京都仏教青年会は、同年東京で“死への準備教育セミナー (Death Education Seminar)”を開催した。また、浄土真宗本願寺派は1986年に実践的なビハーラ・フォーラムを確立し、1990年には具体的な施設と統合するに至った。

学界レベルでは、日本印度学仏教学会が1988年7月に「脳死と臓器移植への諮問委員会」を組織した。そして、同年10月東京大学山上会館において第一回臓器移植問題検討委員会が開催された¹¹⁾。1990年には、次のような6つの話題についての見解を前田恵学委員長 (愛知学院大学) が発表している。委員会としては 1. 脳死および臓器移植問題は、生命に対する尊厳の仏教的原理から宿主と供与者との間で解決すべきである。2. 脳死は、体全体の細胞の死を導く避け難い危機的な段階と認識する。しかし、何が個体死を構成するかについての総意を医師に尋ねる。3. 自身の器官を患者に提供する供与者は、靈魂の尊厳を表明していることを認識する。そして、宿主は自身の生命に必要なこれらの器官を受け取る心の痛みを感じるべきである。4. 移植と人工臓器の開発は、単に適当な終末をつける方法なのであり、終局のものではないと認識すべきであることに注目する。5. 器官を単に体の一部とはみなすべきではない。提供された器官の靈魂の尊厳を認識すること、臓器売買を防ぐあるいは強制によって安全を確保する法律が必要とされる。6. 仏教医学に対してもっとも緊急かつ重要な仕事は、ビハーラ、すなわちターミナル・ケアを扱う仏教ホスピスを確立することであると認識する¹²⁾。

このような見解は妥当と感じられる。また、「死を前にした患者のケアには宗教による靈的ケアが大切な役割を演じることが仏教界にも知られつつある」¹³⁾といわれている。今後の日本の仏教のターミナル・ケアや高度先端医療技術に対する見解や対応が、逆に欧米の「靈的サービス」に対して示唆を与える可能性は十分考えられると思われ、注目を続けていきたいところである。

5. まとめ

本稿は、筆者が2000年4月から7月まで、滞在し研究に取り組むことができた米国メリーランド州に所在するジョンズ・ホプキンス大学病院のパストラル・ケア部における活動をターミナル・ケアの問題と関連させて検討したものである。すなわち、ターミナル・ケア (末期医療) とは「死を間近に迎えた患者に対するケア」¹⁴⁾を指す。そして、過剰と思える先端医療の処置を打ち切り、苦痛の緩和を配慮し、精神的に充実・安定して死を受容しそれを迎えるものと

いう論じ方が一般的である。この精神的に充実・安定させる一方策として、現代の先端医療技術とは別の原理を利用することが試みられている。その一つがパストラル・ケアである。

また、英国のサンダース（Cicely Saunders）が1967年にロンドン郊外に設けた聖クリストファー・ホスピスがホスピスの嚆矢とされる。そこは、末期がん患者に対して痛みを緩和し、死への恐れや不安を和らげ平静な心が与えられる施設を目指していた。そして、具体的なターミナル・ケアとして、1. 患者を一人の人間として扱う 2. 苦しみを和らげる 3. 不適当な治療を避ける 4. 家族のケア 5. チームワークを挙げた¹³。それ以降、欧米で数多く見られるキリスト教系のホスピスの中には「霊的ケアという人間の魂を支えるケアを宗教的ケアとして提供しているところが多い」¹⁴のである。

その背景として、キリスト者で長年聖路加国際病院に勤務し、聖路加看護大学学長などを務め、末期医療に関する多数の論考がある日野原重明は、今日の医学が「ますます科学主義に強く傾き」「医学は哲学や宗教から全く離れ、倫理性を失うまでに至った」と指摘している¹⁵。すなわち、「ケアの心を忘れてキュアが科学の旗印のみを高く掲げて独立した」¹⁶のが20世紀の医学と捉えられているのである。そこで、21世紀の医学は「ケアの中にこそキュアは科学として成長し、確立していかなければならない」¹⁷というように「医」の原点をいま一度見直すことを求めている。

また、前述の日野原がいうように「欧米では臨死患者には、院内のチャプレンや院外の神父、牧師、ラビ、その他の宗教家が呼ばれ、時には臨死の儀式（終油の式）を行うものが普通である。」しかし、「日本では僧侶が出入りすることは、病院もまた患者もこれを受け入れない習慣がある」¹⁸のはよく知られたところであろう。そうかといって日本人が先端医療技術・科学的医学を欧米よりも大いに期待しているとも思われない。

「肉体が病んでも心が病まない人には、その病いに耐えられる不思議な力があたえる」¹⁹といわれるが、今後その「不思議な力」の合理的説明や現代の科学的知識の枠組みの中でどこまで解釈が可能なかの検討が求められるであろう。逆に、終末に際しての宗教の関わりが日本の歴史・文化・社会のありようを浮き彫りにする好事例ともなるようにも感じられる。

本論をまとめるにあたって、パストラル・ケアの経緯と現状についてジョーンズ・ホプキンス大学病院パストラル・ケア部長マン（Stephen L. Mann）先生から懇切丁寧な解説をして頂きました。また、4節で触れた仏教関係の記述に関して、立正大学社会福祉学部の三友量順先生から貴重な助言を得ました。記して感謝の意を表わします。本研究は、2000（平成12）年度立正大学石橋湛山記念基金助成及び立正大学社会福祉研究所プロジェクト助成における成果の一部である。

文 献

- (1) 溝口 元 (2001) ワシントン大学ソーシャル・ワーク学部概要およびシアトル市におけるコミュニティ・サポートについて 立正社会福祉研究 2 103-112
- (2) 溝口 元 (2000) 動物介在療法: 新たな「癒し」の一形態 『仏教と環境 立正大学仏教学部開設50周年記念論文集』丸善 pp. 157-173
- (3) Brown, Norman W. (1926) *Johns Hopkins Half-Century Directory*, The Johns Hopkins University, Baltimore
- (4) Swanson, C. P. (1951) A History of Biology at the Johns Hopkins University, *Bios* 22(4) 223-262
- (5) Flexner, Simon (1943) William Henry Welch, National Academy of Sciences Biographical Memoir 32 215-222
- (6) Franklin Parker (1960) Influences on the founder of the Johns Hopkins University and the Johns Hopkins Hospital, *Bull. Hist. Med.* 34 148-153
- (7) Barker, Robert L. (1999) *The Social Work Dictionary 4th Edition*, NASW Press, Washington D.C., pp. 351-352
- (8) Duncombe, David C. (1978) Pastoral Minister in *Encyclopedia of Bioethics*, Volume 3 (W.T.Reich, editor-in-chief), The Free Press, New York, pp. 1189-1194
- (9) Pargament, Kenneth I. (1997) *The psychology of religion and coping: Theory, research, practice*, New York, Guilford Publications
- (10) Fujii, Masao (1991) Buddhism and Bioethics in *Bioethics Yearbook*, Volume 1, Theological Developments in Bioethics (Baruch A. Brody ed.) Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, pp. 61-68
- (11) 日本印度学仏教学会 (1988) 会報 印度学仏教学研究 37(2) 781
- (12) 前田恵学 (1990) 臓器移植問題検討委員会の歩み 印度学 仏教学研究 39(1) 291-301
- (13) 日野原重明 (1997) 『現代医学と宗教 叢書現代の宗教9』岩波書店 p. 23
- (14) 厚生省医務局編 (1983) 『生命と倫理に関する懇談』薬事日報社 p. 202
- (15) Phipps, William E. (1988) The origin of hospices / hospitals, *Death Studies* 12 91-99
- (16) 日野原 前掲書(13) p. 166
- (17) 日野原 前掲書(13) pp. 83-84
- (18) 日野原 前掲書(13) p. 106
- (19) 日野原 前掲書(13) pp. 47-48
- (20) 日野原 前掲書(13) p. 40



写真1 ジョンズ・ホプキンス大学病院入口



写真2 ジョンズ・ホプキンス大学病院（旧館）



写真3 ジョンズ・ホプキンス大学ウィルチ医学図書館



写真4 ジョンズ・ホプキンス大学医学アーカイブ



写真5 「のんびりカメ」（長期入院児童のための運動会）



写真6 「のんびりカメ」の一光景

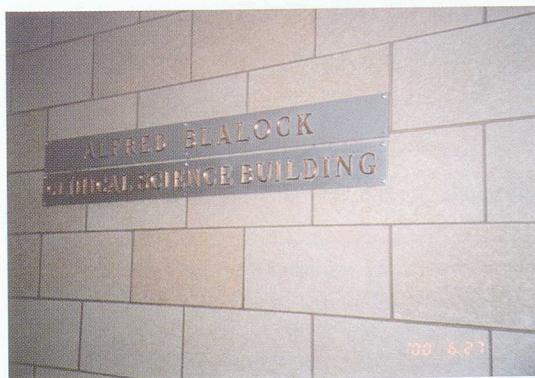


写真7 ジョンズ・ホプキンス大学アルフレッド・ブラロック化学棟

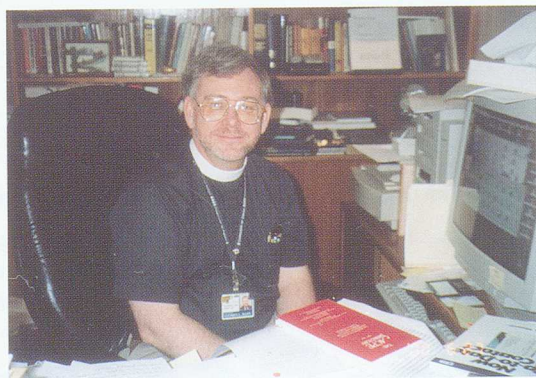


写真8 ジョンズ・ホプキンス大学病院パストラル・ケア部長マン氏